

〔Ⅱ〕 基 調 報 告

教育活動の総合化

—— 国際理解と平和の教育を軸にして ——

丸 山 豊

今回の研究協議会のテーマは、メインが「教育活動の総合化」でありサブテーマが「国際理解と平和の教育」となっています。なぜ、サブに今タブー視されている平和教育と、新指導要領の花形「国際化」が肩を並べて登場したのかについて報告することで基調報告に替えたいと思います。

私達は足掛け2年に渡って新しい学校づくり・学校改革を掲げ、それこそ白熱した論議を繰り返してきました。その論議の中から「国際理解教育」と「平和教育」のドッキングが生まれ、本校の新しい教育課程に生かしていこうということになってわけです。

なぜ、今この時期に学校改革なのか、新指導要領を見通したものなのか、と疑問に思われるかも知れませんがそもそもの発端は指導要領とは全く関係なかったのです。本当のきっかけは、ひょっとすると附属学校が消えてなくなるかも知れないという危機感です。つまり国鉄の次は病院、その次は大学、1番弱い附属学校にその波が及ぶということです。「今のうちに何か手を打たなくては、他の学校ではできないような特色ある学校づくりを」ということなのですね。

本校は有り難いことに中学、高校が併設されており、我々も教師も一体となって学校運営に携わっています。全く一つの学校であるのかかわらず本中学から高校へは入学試験を行い何人かを外の高校へ放出していました。この弊害は余りに大きいということで1989年度中学入試改革を行いました。どこを改革したかといいますと今までは完全抽選、つまりクジで入学者を決定していたのを、今回は、抽選で1.5倍に絞りその後80名を選考することとし、彼らは、中高6年間必ず教育をしようということになりました。いわば、6年制中等学校をめざしたわけですね。しかし、臨教審のいう「6年制中等学校」とは違います。第1にエリート校にならない、第2に中学2クラス、高校3クラスという変則で完全な中高一貫校ではないということ。このことは様々な問題を抱えこむわけですが今回は触れません。

この入試改革の論議のなかで「我々はどんな学校を目指すのか」が問われることになりました。つまり何のための入試改革か、何のための中高一貫かです。ここで一挙に国際理解と平和教育が登場したのではあり

ません。今日の教育情勢下そう簡単ではありませんね。一方、具体的で社会へ向けての我々の姿勢を示さなくてはならない。3か月かけてようやくまとまりました。私はこの日付をつけて「1988.10.19文書」といっています。いまから読んでみます。

「本校の教育方針は、自由と自主を尊重し、生徒一人一人を心豊かで主体性のある人間を育成し、受験という動機づけのみに依存するのではなく、本来の学習とは何か、何のための学習かを常に考えさせることにより、確かな基礎学力を身につけさせ、かつそれぞれの生き方をつかませようとするものです。従って本校に受け入れる生徒は、このような教育方針を理解し、中高一貫して本校の教育を受けることを第一希望とする生徒であることが望まれます。

この様な生徒を得て、国民のための中高一貫教育(男女共学の堅持、完成教育という面を重視した中等教育、将来にわたる自己教育の能力を養う教育等)を目ざすユニークな教育課程の開発と実践及び教育条件の整備にとり組みます。」(1988.10.19教育学部附属学校運営委員会)

これは、本来の学校をどう取り戻すか、です。愛知の教育環境からするとユニークを通りすぎて物笑いの種になるかも知れません。本校の教官にすらそれを指摘する声もあったほどです。しかし公の文書として一人歩きし始めたわけで、これを否定することは許されない。これは本校の教育宣言です。「自由と自主を教育する学校」「受験という動機付でない本来の学習」「そのための新しい教育課程の開発と実践」という教育宣言です。

宣言の後のほうが大切なのです。フランス革命も宣言の後に様々な問題が出てくる。我々は、この宣言後、噴出する様々な問題を「学校改革」「学校づくり」という中で解決していこうという道をとりました。今回の研究協議会は、そのための一里塚にすぎません。

さて、その学校づくりの論議、これに1年半かけています。まず若手による「将来計画委員会」を設置したのが2年前、88年12月。改革のメスは若い人に限ります。若い先生方は大胆な提案をしてくれました。周辺の高校は受験体制下で「学校の空洞化現象」が現れているとして、附属はその二の舞になるな、という見

事なものです。彼らの答申を土台にして、昨年の一学は全員参加で（これが大事です。学校づくりには）様々な意見交換の場をもちました。年齢別分科会（年寄りには年寄り同志）また、問題別小委員会、これは6つ設定しました。教育課程、学校行事、脱教科、国際化、生徒指導・進路、教育条整備」の6つです。全員どこかに所属し自分たちの学校を「教育宣言」にそってどう改革するかを話し合いました。その結果を昨年度は8月31日発表し質疑をしたわけです。1日かかりました。各小委員会からの提案の要旨は、紀要に載せてあります。

提案すべてを実現することは身体がもたない。また理念ばかりが先行し具体案が何一つまとまらなかったと言うことがよくあります。総論賛成、各論反対です。私達はこれだけは避けたかった。理念はともかくまず実現出来るものを具体的改革案として合意していく方法をとったわけです。

多くの先生方が何を考え望んでいるか、その中の最大公約数、共通項が具体化していく。週5日制、平和教育、中1宿泊行事、海外修学旅行、校則のない学校、食堂のある学校色々です。学校改革の原案担当の「研究委員会」では、これら全体を包括するテーマとして「教育活動の総合化」構想が浮上し、ごった煮の提案をこの線で統一整理しよう、そのため各学年に「学年テーマ」を置き、ここに本校の特色を創りだそうとしたわけです。学年テーマを紹介します中1「人権」中2「国際理解をふかめる」中3「平和について考える」高1「環境について学ぶ」高2「平和について考える」高3「生き方、進路について考える」です。このテーマ学習のために特設時間を設定しよう。この案は見事に否決されました。もう少し絞って、中高一貫したテーマ（教育目標）にせよというのです。本校は教官会議が最高の決定機関ですから委員会原案が否決されることは日常的にあります。

こうした論議を繰り返した結果、国際理解と平和教育の2本柱に落ち着いたというわけです。研究委員会メンバーからすると、「ひょうたんからコマ」のようでした。

実は、研究委員会内部で「平和教育」を前面に掲げると教官会議で否決される恐れがあると自己規制していたのです。これは大きな誤算でした。よく考えると小委員会の提案の中には平和教育に関わるものが色々なところからでてくる。また、将来計画委員会も間接的ではあるが触れていた。昨年度までの本校の校長（鈴木英一教授）は、朝礼、集会のときの話の内容は、まさに平和教育そのものであった。広島への研究旅行は13年、長崎2年の歴史が本校に平和教育の土台を築き

上げていたということに気がつきました。

また、「国際理解教育」については、若手の将来計画委員会が「国際化」「情報化」を提案していますし、バスに乗り遅れるなどという気持ちも動いていたようです。ただ、流行の「国際化」だけでいいかという疑問もありました。

問題は学校改革の目標として「国際理解」「平和教育」が結び付くかということです。これこそ本日の研究協議会の課題であり、参加者の皆様方のご批判をいただきたいところです。つまり私達の力量が問われるーつまり新学習指導要領を創造的に乗り切れるかです。そうでなければこの2つはドッキングしない水と油になっていしまう。

具体的な改革例からこの2つがどう生かされようとしているのか紹介したい。まず、宿泊行事の新設と目的地の変更があります。中1のオリエンテーション合宿を新設。1泊2日です。これも大変もめました。国際理解と平和の教育にどう関連するのか、というわけです。こうして新しい行事の目標が洗い直されていく。人を差別しない、いじめないといった人権教育、教師の生徒理解、相互理解、生徒指導の在り方へ発展するわけです。

集団訓練や管理を1目標にしない行事に変わっていくことが可能であることに気づきました。

中3はヒロシマ、大久野島へ連れていくことにした。高校2年は沖縄です。ここに平和教育の中身が問われます。加害者責任、基地、まさにイラクのクウェート侵略もオキナワから見えてくる。ここに初めて「国際化」「国際理解」とは何か、アジアへ視点を向けた新しい目標が生まれてくると思うのです。

学校行事も然り。入学式、卒業式の在り方も考えていかねばならない。新しい教育課程、生徒指導も統一的に考えていく必要がある。生徒指導においても変化の兆しが出ています。国際化にふさわしい生徒指導の在り方、子どもの権利条約を見通した指導の在り方（大変困難な問題かと思いますが）を探っていきたいと考えています。ひいては私達の教育観にまで及ぶテーマになるかもしれない。大変なことですね。

このように、いざスタートを切ろうとしていたところ「研究協議会」を迎えてしまったわけです。したがって未熟な、研究には程遠い発表かと思いますが、研究のための研究ではない、学校改革、学校づくり、実践のために参加者の皆様方のご意見が欲しいと考えています。共に教育の在り方を考えていきたいと思っています。

以上をもちまして、基調報告と致します。ありがとうございました。